

誘惑者としての新田勲

——深田耕一郎『福祉と贈与』が他でもありえた可能性についてのメモ——

Isao Nitta as a Seducer:

A Review on Koichiro Fukada's *Welfare and Gift (Fukushi to Zoyo)*

奥村 隆

Takashi Okumura

This paper reviewing Koichiro Fukada's *Welfare and Gift (Fukushi to Zoyo)* tries to put the world of Isao Nitta, whose independent life is the subject of this book, into a context other than "welfare" and "gift". We can choose "welfare" and "struggle", "labour", "education", "play and humor" and so on as substitutive contexts, but this paper regards Nitta's world in terms of "welfare" and "seduction". In a sense Nitta seduced plenty of people surrounding him, which constituted one of the most indispensable conditions of his life. Referring to Mita and Sartre's discussions concerning seduction, and Kierkegaard's review on Mozart's *Don Giovanni*, this paper considers singularity/generality and independence/dependence as polemics related to Nitta's unique world and welfare in itself.

1. はじめに——「福祉と××」

私は、深田耕一郎氏の『福祉と贈与——全身性障害者・新田勲と介護者たち』（深田 2013）のもととなった博士論文の指導教員であり、その書評者としては明らかに不適當である。しかし、機会を与えられ、本書についてコメントすることになった⁽¹⁾。本書への内在的なコメントは博論指導と審査のとき何度もしたので、それを繰り返す必要はないだろうし、おそらく好ましくないだろう。だとすれば、できるかぎり外在的なコメントをしたほうがよい。だが、ここではそれをもっとも内在的な地点（ないしウチワネタ）から始めてみよう。

本書は『福祉と贈与』と題されており、2011年10月末に提出された博士論文も同じタイトルとなっている（副題は「ある全身性障害者の自立生活にかんする社会学的研究」）。だが、この論文が予備審査会に提出されたときのタイトルは違っていた。それは、「福祉と闘争——戦後日本における全身性障害者の公的介護保障要求運動にかんする社会学的研究」というものだった。10月初旬の予備審査会報告書によると、この段階の論文は、「(1) エスノグラフィーの記述をより分厚くしてそこから問いを明示的に抽出するとともに、理論的な枠組みを加筆すること、(2) 後半部のインタビューによる章を「運動史」という発想ではなくテーマごとに再構成すること、(3) 介護者であり研究者でもある自身の位置を明確にし、冒頭の問題提起に戻って結論を位置づけ直すこと、という3点」の修正が要求されるようなものだった。つまり、「闘争と運動」を軸にしようとしてはいるけれども、ま

だ明確な理論的枠組みをもっていないものだった。

それがいつ「贈与」という理論枠組みに依拠するようになったのか私は覚えていないが、本提出前日の10月30日に私から深田氏に送ったメールにはこう記されている。「タイトルですが、読んでみてふたつのことを思いました。ひとつは、「贈与」の位置づけですが、確かに重くなっていますね。そして、「闘争」は後ろに引いているように思います。だったら、主題を「福祉と贈与」にしてはどう？」（もうひとつは副題にかんすること）。深田氏は、このタイトルを採用してくれ、本提出後の審査過程で「贈与」という枠組みを修正するたびにくつきりとさせていき、最終的にきわめて高い水準の博士論文を完成した。

このプロセスはこの論文が「福祉と贈与」ではなく「福祉と闘争」でありえたかもしれないことを示しているだろう。「闘争」という枠組みを最後まで貫いたとしたら、本書はどんなものになっただろうか。いや、本書には、「贈与」という枠組みでもとらえようとすればできるけれども、他の枠組みでもとらえうる（そのほうがふさわしい）ことがたくさん含まれているだろう。「福祉と贈与」や「福祉と闘争」以外の、さまざまな「福祉と××」がありえたのではないだろうか。そうしたさまざまな要素を、この優れたエスノグラフィは、新田勲という人が生きた世界から私たちにを見せてくれているのではないか。

その可能性をいくつか想像してみよう。まず「福祉と闘争」であるが、新田勲が福祉（あるいは贈与）がもつ支配や抑圧を「拒否」し、それに「抵抗」し、「運動」し、他者に「要求」し、「呼びかけ」、なにかを「獲得」したことを、私たちは本書に読みとるだろう。「贈与」と「闘争」がどうかかわるか、という問題を私たちは考えることもできる。

しかしこれだけではない。たとえば、「福祉と労働」という問題系を考えることもできる。深田氏自身のような「こわばった身体」が「肉体を酷使」して、ケアという「労働」を行う身体になっていく。その労働者が生活できるようにする「貨幣」を調達する「制度」をつくりだし、「事業」として運営していく。「労働者」同士の連帯や反発が生まれる。また、「福祉と教育」というタイトルも考えられるだろう。多くの介護者たちは、まるで師匠と弟子であるかのように、新田からケアの仕方や足文字の読み方を学び、新田がとくに教えようとも思わなかったさまざまなことも学ぶ。深田氏があとがきで新田を「贈与の先生」と呼ぶように、新田に「育ててもらった」と語る介護者がなんと多いことだろう。

あるいは、「福祉と遊戯」「福祉と社交」「福祉とユーモア」「福祉と笑い」というテーマをゆたかに描いていることが、本書の大きな魅力であり、美点であるだろう。それがあつてはじめて新田と介護者たちの世界は可能であるのだし、それは仮に「福祉」が「正義」や「善意」に縛られることがあるとすれば、その文脈を緩やかにし、脱臼させる。「遊びとしての福祉」は、「運動」ではなく「生活」をつづけるためには必要不可欠であるだろう。

これ以外にもいろいろな「福祉と××」を想像することができるだろう。しかしここでは、おそらく深田氏も重視しているだろう次のペアを考えたい。「福祉とエロス」。あるいは、深田氏があまり考えていないかもしれない次の言葉を導入してみよう。「福祉と誘惑」。さまざまなエロティックな誘惑が仕掛けられた世界として、新田の世界を見てはどうか。あるいは、「誘惑者」として新田勲をとらえ直してはどうだろうか。

新田は女によくもてる。深田氏はそれを「女たらし」「人たらし」と呼ぶ。本書の注には新田をめぐるエピソードが満載であるが、第3章注1には、「新田は過去、女性と「同棲3回、結婚3回（本人談）の遍歴を持ち」、かわらず「女性に目がない」ので、パートナー

の三谷は「新田がいつ浮気をするかわからないと気が気でなかったという」とある。三谷が「この人どこかで浮気してんじゃないかって」心配すると、新田は「何いってんだ、浮気じゃない、本気だ、いつも本気」とまぜかえす(197-8)⁽²⁾。このエロさはなんだろうか。このエロスがなければ、新田がした「福祉活動」は可能だったろうか。女たちだけでなく介護者たちはみな新田に「誘惑」されていたのではないか。

仮に『福祉と誘惑』をいう本を書くとしたらどうしたらよいか(博士論文は難しいかもしれないが)。そこには、深田氏が「贈与」を論じるために引いたマルセル・モースや今村仁司に代わる枠組みが必要になるだろう。さて、誰を選べばいいだろうか。——このあたりから、本書をネタにはするけれども、私が行うべき外在的なコメントに移っていきたい。

2. 足文字は誘う！——サルトルと「恥ずかしい身体」

本書にはさまざまに印象深いエピソードが登場するが、私にとってとりわけ印象的なのは、新田が足文字によって役人たちと対峙する場面である。言語障害がある新田が、足文字という介護者だけが読みとれる「遅く」「わかりにくい」言語によって、口の達者な行政官より優位に立つ。行政官は、自分が読みとれないことによって、介護が「単独性」を必要とすることを説得されてしまう。そして、彼らはその私的言語の意味を介護者に教えてもらうという立場になり、教える人＝知っている人(新田＝介護者)と教わる人＝知らない人(行政官)という関係が生まれて、「足文字は強者／弱者の力関係を転倒させる」。深田氏はこれを「強者になることで相手を打ち負かすのではなく、弱者であるままで強者より優位に立とうとしている」と評し、足文字は「力関係を逆転させる闘争の言語としての機能を持つ」という。まさに「足文字は叫ぶ！」(新田編の著書名)というわけだ(216-21)。

確かに「福祉と闘争」という文脈ではそうだろう。行政官は思わず「すみません」と謝ってしまうのだから。また、いつからか足文字を「職員が自分から近づいてきて読む」ようになる。これも「新田の勝利」であり、新田が「折衝の主導権を握る」事態だろう(220)。

ただ、これはただ「勝利する」「優位に立つ」「力関係を転倒させる」だけではないようにも思われる。というのは、「勝利」は相手を「敗北」させ、結果として相手が自分から遠ざかっていくことはよくあるからだ。だが、ここで役人は新田に近づいている。「闘争的対話に引きずり込まれ」(220)ているともいえるが、なにかしら引き寄せられ、誘われているようでもある。もちろん、介護者が足文字を読む(読み方を学ぶ)ときもそうだろう。たとえば「口が達者な」人間が言語を音声で発するのとはおそらく違う形で、この言語は人を近づけ、引き寄せる。それはもしかしたら、誘惑している、といえるかもしれない。

「誘惑する」とはどういうことだろうか。本書でしばしば引用される「交響圏とルール圏」の著者見田宗介は、真木悠介名義の『自我の起原』の第7章を「誘惑の磁場——(他者)の内部化」と名づけている。「愛とエゴイズムの動物社会学」と副題のついたこの本は、「生成子」(gene、通常の訳語は「遺伝子」と「自我(個体)」の関係を主題とするが、ここで真木はドーキンスの『延長された表現型』を引きながら、生物個体間、個体内細胞間、細胞内生成子間の調和・協同・相補性について論じている(真木 1998: 132)。ガンやエイズのレトロウィルスは人間の細胞の遺伝子を組み換えて住み着くが、宿主を殺してしまい、コレラやペストは宿主の対抗戦略を誘発してジェノサイドの危機に立つ。むしろ宿主にと

って無害、あるいはポジティブな共生のほうがすぐれた戦略であり、「生成子の「利己的な」戦略として考えてみても、他者に苦痛や死をもたらすという仕方でのその身体を操作することよりも、他者自身が喜びをもって、あるいは生存と繁殖の機会を増来させるような仕方での協力を引き出す戦略がすぐれた「戦略」であるはずである。それは他者の「対抗戦略を誘発しない」し、その他者の「存続と再生産の機会を増加する」（真木 1998: 134-5）。

こうした戦略の例として「昆虫と顕花植物の「共進化」（クローバーの芳香に引き寄せられるハナバチ）、ローレンツの「幼児図式」（幼児の「かわいさ」に利己的な人も愛他的感情を覚える）が挙げられる（真木 1998: 136-7）。「かんたんといえば「愛される」個体をつくりあげる力をもった生成子こそが勝ち残る」（真木 1998: 138）。他者が「働きかけられてあること」に対して「喜びを感じるような仕方での誘惑すること」。これを真木は「わたしたちの身体が、〈他者〉のためにもまたつくられる」と表現し、その一般的で安定に成功している現象が「性という現象」だという（真木 1998: 139）。「個体が個体にはたらきかける仕方の究極は誘惑である。他者に喜びを与えることである。われわれの経験することのできる生の歓喜は、性であれ、子供の「かわいさ」であれ、花の彩色、森の喧噪に包囲されていることであれ、いつも他者から〈作用されてあること〉の喜びである」（真木 1998: 145）。

他者の「対抗」を誘発する「闘争」よりも、「喜び」を誘発する「誘惑」がすぐれた戦略である（あるいは「闘争」とともに「誘惑」が必要である）。なるほど。しかし、この議論は明らかに急ぎ過ぎているだろう。足文字は「闘争の言語」であるとともに、「誘惑の言語」である？ 役人たちは足文字を読むことに「喜び」を感じている？？ 新田勲は「愛されキャラ」である？？

ここで誘惑を論じたもうひとりの議論を見てみよう。ジャン＝ポール・サルトルは『存在と無』の「まなざし」論において、他者にまなざされることによって、他者が「主体（目）」となり、私が「客体（身体）」となることを論じたうえで、それが帰結するふたつの関係性を対比する。ひとつは「相剋（葛藤）」である。私は「他者という主体」の「客体」にならないように、他者を「客体」のままにしようとし、他者も同様にしようとする。「私が他者の支配から私を解放しようところみるあいだに、他者は私の支配から彼自身を解放しようところみる。私が他者を屈服させようところみるあいだに、他者は私を屈服させようところみる」（Sartre 1943=2007: 316）。この葛藤・相剋（≒闘争）が、対他存在の根源的な意味である。

しかし、サルトルはもうひとつの関係性があるとして、それを「愛」あるいは「誘惑」と呼ぶ。そこでは他者の「主体」という性格を除き去り、相手を「客体」としようとするのではない。「相手の全面的な服従は恋する人の愛を殺すことになる。もし相手が自動人形に変じたならば、恋する人はひとりぼっちになる」（Sartre 1943=2007: 323）。愛されようと望むとき、他者はあくまで「主体」でなくてはならない。ということは、私は他者という「主体」にとっての「客体」であって、「客体」という立場において相手を手に入れなければならないのだ。

この不可能と思える試みが「誘惑」である。「恋する人は相手を誘惑しなくてはならない」。そして、「誘惑するとは、他者にとっての対象存在を、完全に冒されるべき危険として、私の身に引き受けることである。誘惑するとは他者のまなざしのもとに私を置くこと

であり、他者によって私のうえにまなざしを向けるようにすることである。誘惑するとは、新たな出発をなすために、見られる危険を冒すことであり、私の対象存在によって、また私の対象存在のうちにおいて、他人をわがものにすることである」(Sartre 1943=2007: 333)。他者という主体に対して、対象となる危険を引き受けること。それなしに誘惑はできない。

しかし、誘惑しようとするとき、「私は暗中模索のありさまである。……私は、自分のいろいろなしぐさや態度がどんな効果をもつのかを考えてみることもすらできない。というのも、私のしぐさや態度はそれを超出する一つの自由によってつねにとりもどされ、根拠づけられるからであり、またこの自由がそれらに一つの意味を付与するのではないかぎり、何の意味ももちえないからである。それゆえ、私のいろいろな表現の〈意味〉はつねに私から逃れ去る。私は、私の意味しようとしていることをはたして意味しているのかどうか、正確に知ることはできないし、はたして私が有意味的であるかどうかということさえ、正確に知ることができない」(Sartre 1943=2007: 338)。誘惑が成功し、私が愛されるかどうかを決めるのは、「主体」としての他者、まなざしを向ける他者でしかない。私は、その自由な主体のまえに対象として身を投げ出すしかない。

新田の振る舞いは、このような「主体」としての他者に投げ出されているようにも見える。ひとつは、それが「身体」によるということだ。「口の達者な者」が言語によってなにかを伝えるとき、その言語(声や文字)がなにか(意味)を伝える手段(メディア)となるだろう。このとき、言語はできるかぎり透明に(ノイズなく)意味・メッセージを伝えることができればよいことになる。しかし、新田の言語は「身体」そのものであって、新田自身が「まなざし」の対象となる。「身体」はつねに透明なメディアにはなりきらず、そこに存在するものであり、新田そのものでありつづけるだろう。

エロスや誘惑とはそのようなものだ。たとえば近代的な労働やコミュニケーションにおいて、「身体」は手段であるか無関連とされるべきものである。これに対して、「身体」が目的となって「まなざされ」、「愛撫される」ことがエロスであろう(からだ目当て!)。誘惑とはそのような目的・客体として自らの「身体」を投げ出すことである。新田はつねにそのように「身体」を投げ出してきたのではないだろうか。たとえば「入浴介護」において(そのとき、介護者もまた、「身体」を裸にして投げ出すことを要求される。このとき、介護者の身体は「エロティック」なものとなるのだろうか?)。

このとき、身体は安全ではない。身体が「透明なメディア」「手段」であるとき、身体は安全だろう。しかし、身体が「エロス」と「誘惑」に開かれているとき、それは「暴力」の目的となる「冒されるべき危険」を引き受けることになる。また、およそ誘惑するとき、その身体は「恥ずかしい」。サルトルはその「まなざし」論で、「主体」だと思っていた者(窃視者)がじつはまなざしの「客体」だったと気づいた(覗かれていた)ときの「根原的失墜の感情」を「羞恥」と呼ぶ(Sartre 1943=2007: 184)。「誘惑」するとは、おそらく「羞恥」を引き受けることを意味するだろう。新田は「障害者を恥ずかしくない親はいないよ」と述べる(133)。この「恥ずかしい身体」を新田は介護者にも行政官にも「まなざし」の客体として投げ出す。

そして、もうひとつ、このときの新田の身体は「賭け」のなかにある。サルトルは、誘惑しようとするとき、人は「暗中模索」のなかにあると述べた。投げ出された身体の意味を決めるのは他者でしかない。新田はその他者に「賭ける」。彼は「人間に賭ける」、「社会

に賭ける」と繰り返す(72)。

深田氏は、新田が「一撃」を与え、「負い目感情」を生む、という。だが、この「一撃」をどう受け止めるかは相手の「主体」に委ねられる。それは「負い目」だけではないだろう。そして、新田はそれを自分で決めはせず、他者に委ねる。新田は相手を「全面的に服従」させ、「自動人形」にすることはしないだろう。

深田氏は、新田は「何かわれわれのことを信じて全力でぶつかってくる」という(72-3)。新田は相手の「主体」に「賭ける」。そして、「相手に一撃をくらわすだけでなく、崩れ落ちた相手を救う」。健常者スタッフの西田寛が「最後で笑うじゃん。はずすでしょ。あれが救われるのよね」というように、「追い込んだ後の新田のかわいらしい笑顔」に「救われる」(72)。そのようにして、人々は新田に「誘惑される」のではないだろうか。

しかし、まだ議論を急ぎ過ぎているように思う。次節では、さらにもうひとり、誘惑を論じた人を経由してみることにしよう。

3. 新田勲はドン・ジョヴァンニである？——キルケゴールと「単独性／一般性」

ゼーレン・キルケゴールは、1843年の『あれか、これか』のなかでモーツァルトのオペラ『ドン・ジョヴァンニ』について論じている(第1部第2章「直接的、エロスのな諸段階——あるいは音楽的=エロスのなもの」)。そこで彼は、音楽は「直接的=エロスの」なものを表現するという。言語が「反省」によって感性的・直接的なものを否定することによって「完全な媒介」になるのに対して(Kierkegaard 1843=2006: 48)、音楽は「直接的なものを直接性のなかに表現する」(Kierkegaard 1843=2006: 52)。そして、音楽で表現された無比の誘惑者がドン・ジョヴァンニである。

ダ・ポンテ=モーツァルトによるこのオペラで、ドン・ジョヴァンニはドンナ・エルヴィーラとの結婚3日後に逃げ出し、ドン・オッターヴィオの婚約者ドンナ・アンナを襲って父の騎士長を殺害し、結婚式当日の農民の娘ツェルリーナを誘惑する。従者レポレッロが、追ってきたドンナ・エルヴィーラに主人の行状を教える「カタログのアリア」では、「スペインだけで1003人」の女性をものにし、レポレッロがそれを記録している。

これを深田氏の優れた学術書『福祉と贈与』と比較するとは、なんと不謹慎な！だが、キルケゴールがいうことを聞いてみよう。彼はモリエールの『ドン・ファン』とモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』を比較しながら、前者が「反省的・策略的」であって(言語!)、そこでは娘の心に忍び込む「狡知」や心を抑える「支配力」や「相手をたぶらかす計画的、継続的な誘惑」が問題になるとする(Kierkegaard 1843=2006: 123)。これに対して後者は、ただただ感性的に誘惑する。ドン・ジョヴァンニには狡知や策略などの「反省と意識」が欠けている。「だから彼は誘惑するのではない。彼は欲し、この欲念が誘惑的に作用するのであって、そのかぎりでは彼は誘惑する」(Kierkegaard 1843=2006: 106)。この直接的・感性的なものは、「音楽」だけが表現できる。

ここで重要なのは以下の2点である。第一に、反省的・心的ではなく感性的に誘惑するドン・ジョヴァンニは、「ひとりの女を愛さずにすべての女を愛する。すなわち、すべての女を誘惑するのである」(Kierkegaard 1843=2006: 97)。「心的な愛」(言語で表現できる)は「ニュアンスが本来の意義をなしている個別的な生の豊かな多様性のなかを動く」

(Kierkegaard 1843=2006: 99)。「ドン・ファンが百人も誘惑するのに、ドン・ファンを再現するファウストがただひとりの娘だけしか誘惑しない」ことにキルケゴールは注目する (Kierkegaard 1843=2006: 107)。「感性的な愛」にとって「本質的なものはまったく抽象的な女性であり」、あらゆる女性の「いっさいをいっしょくたにすることができる」 (Kierkegaard 1843=2006: 99)。

このオペラでドン・ジョヴァンニが熱心に誘惑する(そして失敗する)のは、「小さな百姓女」ツェルリーナであるが、キルケゴールによればモーツァルトは彼女を「できうるかぎり重要でないように作っている」(Kierkegaard 1843=2006: 102-3)。つまり、彼女は特別な女ではなく、女一般である。そして、「ドン・ジョヴァンニにとってはどんな娘もあたりまえの娘であり、どんな愛の冒険も日常的な話である。ツェルリーナは若くて愛らしいし、女であるが、このことは彼女が数百人の娘と共有するなみなみならぬ点である。しかしドン・ジョヴァンニの欲するのはこのなみなみならぬ点ではなく、彼女があらゆる女と共有するあたりまえの点である」(Kierkegaard 1843=2006: 103)。

そして第二に、ドン・ジョヴァンニは、この「あたりまえの女」を、誘惑することで特別な女にしてしまう。彼は感性的に「あらゆる女のなかに女性的なもの全体を欲する」が、そのエネルギーによって「獲物を美化し同時に征服する、感性的理想化の威力」が生まれる。「この巨人的な情熱の反射は欲せられた相手を美化し発達させるので、相手は情熱の反映によって高められた美のなかで燃え立つ」。「スカートをはいた相手なら」誰でも相手にする彼は、「老いた女を若返らせて女性的なものの美しい中心に移し、子供をほとんど一瞬のうちに成熟させる」(Kierkegaard 1843=2006: 108)。このドン・ジョヴァンニの誘惑によって、どの女も輝き始めるのだ。

いや女だけではない。彼の従者レポレツロも、ドン・ジョヴァンニの「直接的な生」によって決定的な影響を与えられ、彼の道具になってしまうほど彼に同化し (Kierkegaard 1843=2006: 155)、その「エロスのなもの」によって「彼は自分の意に反してまでもドン・ジョヴァンニに縛りつけられている」(Kierkegaard 1843=2006: 156)。石像になって彼を地獄に落とす騎士長以外の全員がドン・ジョヴァンニと「一種のエロスの関係」をもっており (Kierkegaard 1843=2006: 156)、「太陽系のなかで中心の太陽から光を受ける暗い星がつねに半面だけ、つまり太陽に向いている面だけ明るい」と同じように、登場人物はみな、「ドン・ジョヴァンニに向いている生の契機・面だけが明るく照らされているだけで、他の点では彼らは暗くて不透明である」(Kierkegaard 1843=2006: 153)。

以上の長々しいドン・ジョヴァンニ論の紹介は、新田がこのような人ではなかったか、という素朴な見立てとともに、次の論点へのいささかの違和感に由来する。深田氏は本書で、長谷正人がいう「ほかとは比較できないような、ある関係が独自にもっている特徴」としての「単独性」という視点を強調している (27)。新田もこう述べる。「私は一対一の関係こそが、人間が考え、成長していくのに欠かすことのできない一番大切な関係だと思ふのです。人間が人間をどこまで思いあうことができるのか、専従という形態のなかでどこまで人間重視という視点を引き出せるか、このことが私が社会で生きるうえで最も大切な賭けです」(438)。この「単独性」は CIL が介護を貨幣化し、商品化し、一般化したこととはまったく異なるものである。そして、介護者各自と新田の関係性も「単独性」をもつ。

しかし、私は次のようにも考える。新田にとっては、介護者は誰でもよかったのではないか（ドン・ジョヴァンニが女であれば誰でもよかったのと同じように）。あるいは、誰でもよいと考えなければ、彼は介護者を確保できなかったのではないか。単純に言って、新田には複数の介護者がいる。彼らはそれぞれ単独ではあるが、同時にとりかえがきくともいえるのではないか。そもそも、介護者になる前は、新田にとっては「人間であれば誰でもよい」のだろう（深田氏が介護者になったのも、偶然のようなものだった）。そして、ドン・ジョヴァンニがそれぞれの「あたりまえの女」を特別な女にしたように、「あたりまえの人間」を「特別な人間」に、あるいは「あたりまえの誰か」を感性的なエネルギーによって「人間的なもの」に変えたのではないだろうか。

これを家族という関係性での「単独性」と比較してみればよい。新田と三谷と美保は他にはとりかえがきかない（新田が「3回結婚」しているとしても、そのときどきのパートナーはひとりだけだ）。たとえば「介護者」（複数のうちのひとり）だった三谷が「関係が深まり、85年に結婚」したとき、それまでの「複数の単独性」から、「単数の単独性」に関係性は変容したことだろう（118）。三谷も美保も新田を介護しない（49）。美保は新田の足文字を読まない（122）。もちろん、深田氏がいうように、これは「家族」という「個人的な存在」と「他人介護者」という「社会的な存在」の相違である（123）。だが、これと比較することで、介護者たちと新田との「単独性」の奇妙さを考えられるように思う。

さきほど「足文字」は「誘惑の言語」ではないか、と述べたが、新田はおそらく美保を誘惑しようとしていないし、三谷についてもそうかもしれない（第1章の注2によれば、新田は三谷について「一番じっくりする呼び名」を問われて「元カノ」（！）と答えたという（74）。つまり、「もう誘惑しなくてよい人」ということだ）。これに対して、新田は介護者を誘惑しつづけている。いわば、ずっとラブレターを送りつづけている。そして、深田氏にも、80年代の介護者・後藤陽子にも強烈なラブレターを送っている。つまり、「みんな」にラブレターを送っているのだ。みんなにラブレターを送る、みんなを誘惑する、とはどういうことだろうか。ここで「単独性」とはなんなのだろう。

そして、ドン・ジョヴァンニという太陽によって、それとエロス的な関係を結んだ全員が輝き始めるのと同じように、新田と関係を結んでいるかぎりにおいて、それぞれの被誘惑者は「人間」として輝くだろう。しかし、ただひとつのとりかえがきかない太陽によって輝く惑星は、ひとつではなくて複数存在する。彼は私と「単独性」の関係を結んでいるが、じつは他の人とも「単独性」の関係を結んでいるのだ。このとき、介護者には、とりかえがきくのになぜ「単独性」という負荷を引き受けなければならないのか、という思いが生まれるかもしれない。あなたは私だけではなく、「みんな」にラブレターを送っているではないか。新田を「お山の大将」と呼び（465）、「奴隷制」の「使用人だと思ったことがある」（473）と述べる介護者・斎藤正明は、この違和を感じていたのかもしれない。15年間「ともに生きる」思想を実践してきたつもりだった彼が、介護関係が「生活の必要に合わせて「とっかえひっかえ」の関係でも成立すること」に気づき（474）、新田との関係が決裂したことは、この現われではないだろうか。

斎藤は「専従介護を「結婚、夫婦みたいなもんだよ」と語っていた」（480）というが、これは彼の誤解ないし片想いだったのだろう。新田は誰かひとりだけと「単独性」の関係

を結ぶことはしない。なぜか。それは、彼をその人に「依存」する帰結に限りなく近づけるからだ。ひとりとだけ「単独性」の関係を結ぶことは、彼の「自立」を脅かす。「全身性障害者」である彼が「自立生活」をつづけるためには、誰かひとりに「依存」することがあってはならない。彼は「自立」するために、「みんな」を誘惑しつづけてはならない。

深田氏は、新田のことを「究極的に自立的な人」だったという⁽³⁾。その「自立」によって、彼はたくさんの人を誘惑する力を獲得し、誘惑することで「自立」を維持できたのだろう。彼の誘惑は、依存する人のべたべたした誘惑とは違う、自立した人だけがもつ魅力に満ちたものだったのだろう。しかし深田氏は、彼は他の誰ともとりかえのきかない特定の誰かと人格的な関係を結んでいたのだろうか、とも振り返る。彼は多くの人と人格的で「単独性」のある関係を結ぶことができた。しかし誰にも依存しない。誰にも依存しない（依存できない）とき、人は孤独なのではないか。真に「自立」した人に救いはあるのだろうか。

彼の結婚生活もそうだったのかもしれない。モノガミー（単婚制）は、とりかえのきかない誰かひとりと相互に依存しあうことと似ているだろう。新田はそうした「誰かひとり」とだけ単独性を結ぶことができなかつたのではないか。決して誰かひとりに依存しない「自立」した人は、いかにして「パートナー」と暮らしていけるのか。キルケゴールは次のように断言している。「夫婦愛というものは、宗教的あるいは世俗的にいって、他の点がなんであろうとも、ただひとつそれがなりえないものがある。つまりそれは音楽的ではない。それどころか、それは絶対的に非音楽的である」（Kierkegaard 1843=2006: 77）⁽⁴⁾。

オペラの終盤で、ドン・ジョヴァンニは捨ててきた花嫁ドンナ・エルヴィーラが彼に悔い改めるよう求め、赦しと救いを与えようとするのを拒絶する。もしここで彼女に赦されたなら、彼はドンナ・エルヴィーラという「ただひとりの人」にとっての「ただひとりの人」になってしまうからだ。彼は赦しと救いを拒否し、誰のものにもならない自由を守りつづける。この誘惑者はどこまでも「自立」している。しかし彼が救いを得ることはない。

この見立ては見立てにすぎない。ただこの「新田＝ドン・ジョヴァンニ」論は、「単独性」というものが「自立／依存」とどう関係するかを、「誘惑」を手がかりに少し明らかにしたようにも思う。そしてそれは、新田勲という人の世界を論じるためだけでなく、「福祉」がもつ原理的な困難さをさらに踏み込んで考えるための糸口になるかもしれない。

4. 「ドラマ」と「感受」——むすびにかえて

キルケゴールはドン・ジョヴァンニ論の終わり近くで、「ドラマ」と「オペラ」を対比している⁽⁵⁾。最後にこれに触れることで、この外在的な書評を締めくくりたいと思う。

彼によれば、ドラマ（劇）において関心は作品の主人公に集中し、その行動とシチュエーションで「思想」「理念」を表現することに成功することが重要である（先に見た「言語」の特性を思い出せばよい）。これに対して、オペラでは主人公の思想ではなく、その「統一を保つものは、全体を支える基調」であり、全体の「気分」である。「劇を発生せしめた気分、気分としての気分」という「計りがたいもの」は、ドラマでは反省されて「行動の統一」とならなければならない。このとき、「劇的統一はますます気分でなくなり、ますます特定の思想となる」。これに対して、オペラはドラマのように反省しつくされるものではな

く、「劇的ではあるがその統一を気分のうちにもっている音楽的シチュエーションも反省しつくされない」(Kierkegaard 1843=2006: 141-2)。オペラにおいて、「シチュエーションはひたすら気分に乗られている」(Kierkegaard 1843=2006: 148)。そして、「気分」を表現しうるのは、「言語」ではなく「音楽」である。

新田勲の世界を構成したのは、一方では「思想」であるだろう。それなしには「闘争」は不可能であり、彼の「福祉活動」も「自立生活」も成り立たなかっただろうから。しかし他方、そこには「気分」がなければならなかった。あるいは、その「気分」が主人公だったということがあるのかもしれない。新田は介護者たちとともにその「気分」をつくりだし、「エロスの関係性」のなかで介護者たちを「誘惑」しつづけた。

キルケゴールは、オペラに見られる音楽的シチュエーションは「鳴り響くものを共に聞くということによって生じる統一」であるとする。オペラは「あまり十分に反省的ではない」から、そこでは「反省されない実体的な情熱が表現される」。「音楽的シチュエーションは、分離した声の多数における気分の統一に存する」(Kierkegaard 1843=2006: 143)。多数の声が「気分」によって統一される。これと同じことが、本書の新田の世界には起きたのではないだろうか。

この「気分」は「理解」できるものではない。「思想」は「理解」できるが、「気分」は「理解」できない。それはおそらく「感受」(あるいはジュディス・バトラーが理解可能性の枠組みには回収されないとする「感知 (apprehend)」(Butler 2009=2012: 13) ⁽⁶⁾) されるものだろう。深田氏が「相手の身体を感受」といい (60)、介護者・大滝史生が「言葉以前のところで、相手の気持ちをくみ取ってくってという感受性を鋭く」する、というように (488)。深田氏は、それは「わかりあえるものではない」という。そこで語られている「不安や痛み」(488) も「他者のヴァルネラビリティ」も (494) (バトラーも生の「あやうさ (precariousness)」や「被傷性 (vulnerability)」を感知されるものとしている (Butler 2009=2012: 23-6))、「エロス」も「誘惑」も、「理解できない」が「感受されうる」ものだろう。これらは「思想」や「闘争」にとってノイズである。そのノイズを「感受」する⁽⁷⁾ (メッセージを「理解」するのではなく)。それに本書はやはり成功していると思う。

いま気がかりなのは、この優れた成果を形にした深田氏が次になにに取り組むかである。そこには「感受さるべきなにか」がなくてはならない。それが存在する場所と人を見つけられれば (それは「福祉」から遠く離れてもよいだろうが、それがない場所に留まってはならない)、きっとよいだろう。深田氏が次にどんな場所に身をこじいれて、おそらくまたこわばった身体から始めながら、いかなるノイズを感受するか、期待したいと思う。

注

(1) 本稿は、追手門学院大学地域文化創造機構機関研究「文化復興と芸術創造に関する総合的研究」第3回公開フォーラム「ドラマとシステムのまじわるところ——深田耕一郎『福祉と贈与——全身性障害者・新田勲と介護者たち』をめぐって」(2014年2月15日、於追手門学院大阪城スクエア)での報告原稿を改稿したものである。このフォーラムを企画された橋本裕之氏、足立重和氏、コメントーターの蘭由岐子氏 (以上、追手門学院大学)、鶴飼正樹氏 (京都文教大学) および深田氏に感謝申し上げる。

(2) 以下、書評対象書からの引用については、ページ数だけを記す。

- (3) この段落の内容は、上記フォーラムでの深田氏の発言に基づくものである。
- (4) キルケゴールは『魔笛』を評してこう述べているが、生涯唯一のオペラが夫婦愛を称揚する『フィデリオ』だったベートーヴェンがこれを読んだらどう思うだろう。
- (5) ネタバラシをするならば、キルケゴールのドン・ジョヴァンニ論を参照しようと思ったのは、上記フォーラムのタイトルに「ドラマ」という言葉があったことによる。
- (6) 高橋賢次氏（法政大学大学院）からの教示による。
- (7) 清水もも子氏（立教大学大学院）の2013年度修士論文「フィールドワーカーとしての写真家——他者記述における調査と表現のゆらぎ」から示唆を受けた。

参考文献

- Butler, J., 2009, *Frames of War: When is the Life Grievable?*, London: Verso. (=2012, 清水晶子訳『戦争の枠組——生はいつ嘆きうるものであるのか』筑摩書房.)
- 深田耕一郎, 2013, 『福祉と贈与——全身性障害者・新田勲と介護者たち』生活書院.
- Kierkegaard, S., 1843, *Enten=Eller*. (=2006, 浅井真男訳『ドン・ジョヴァンニ 音楽的エロスについて』白水社.)
- 真木悠介, 1998, 『自我の起原——愛とエゴイズムの動物社会学』岩波書店.
- Sartre, J.-P., 1943, *L'être et le néant: Essai d'ontologie phénoménologique*, Paris: Gallimard. (=2007, 松浪信三郎訳『存在と無——現象学的存在論の試み（Ⅱ）』筑摩書房.)

